

漱石全集

第八卷

門

漱石全集
第八卷

門

(第五回配本)

昭和二十二年五月一日 印刷
昭和二十二年五月五日 第一刷發行

漱石全集第八卷 門

定價六拾圓

著者 夏目漱石

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者 横濱市中區龜澤二十九番地
佐藤繁次郎



發行所

東京都千代田區一ツ橋

岩

波書店

配給元

東京都千代田區
浜路町

日本出版配給株式會社

會員番號A一〇九〇〇四號

第六回配本に就ては本奥付添付の購入券を御利用下さい

文壽堂印刷

文壽堂製本

解 門

・

說

目
次

二
九
七

三

門

四三、三一—四三、六一二

宗助は先刻から縁側へ坐蒲團を持ち出して、日當りの好ささうな所へ氣樂に胡坐をかいて見たが、やがて手に持つてゐる雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になつた。秋日和と名のつく程の上天氣なので、往來を行く人の下駄の響が、靜かな町丈に、朗らかに聞えて来る。肱枕をして軒から上を見上ると、奇麗な空が一面に蒼く澄んでゐる。其空が自分の寐てゐる縁側の、窮屈な寸法に較べて見ると、非常に廣大である。たまの日曜に斯うして緩くり空を見る丈でも、大分違ふなと思ひながら、眉を寄せて、ぎら／＼する日を少時見詰めてゐたが、眩しくなつたので、今度はぐると寐返りをして障子の方を向いた。障子の中では細君が裁縫をしてゐる。

「おい、好い天氣だな」と話し掛けた。細君は、

「え」と云つたなりであつた。宗助も別に話したい譯でもなかつたと見えて、夫なり黙つて仕舞つた。しばらくすると今度は細君の方から、

「ちつと散歩でも爲て入らつしやい」と云つた。然し其時は宗助が唯うんと云ふ生返事を返した丈であつた。

二三分して、細君は障子の硝子の所へ顔を寄せて、縁側に寐てゐる夫の姿を覗いて見た。夫はどう云ふ了見か兩膝を曲げて海老の様に窮屈になつてゐる。さうして兩手を組み合はして、其中へ黒い頭を突つ込んでゐるから、肱に挟まれて顔がちつとも見えない。

「貴方そんな所へ寐ると風邪引いてよ」と細君が注意した。細君の言葉は東京の様な、東京でない様な、現代の女學生に共通な一種の調子を持つてゐる。

宗助は兩肱の中で大きな眼をばち／＼させながら、

「寐やせん、大丈夫だ」と小聲で答へた。

夫から又靜かになつた。外を通る護謄車のベルの音が二三度鳴つた後から、遠くで鶏の時音をつくる聲が聞えた。宗助は仕立卸しの紡績織の脊中へ、自然と浸み込んで來る光線の暖味を、襖

衣の下で食ばる程味ひながら、表の音を聴くともなく聴いてゐたが、急に思ひ出した様に、障子越しの細君を呼んで、

「御米、近來の近の字はどう書いたつけね」と尋ねた。細君は別に呆れた様子もなく、若い女に特有なけたまふらしい笑聲も立てず、

「近江のおほの字ぢやなくつて」と答へた。

「其近江のおほの字が分らないんだ」

細君は立て切つた障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指を出して、其先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「斯うでしやう」と云つた限、物指の先を、字の留つた所へ置いたなり、澄み渡つた空を一しきり眺め入つた。宗助は細君の顔も見ずに、

「矢つ張り左様か」と云つたが、冗談でもなかつたと見えて、別に笑もしなかつた。細君も近の字は丸で氣にならない様子で、

「本當に好い御天氣だわね」と半ば獨り言の様に云ひながら、障子を開けた儘又裁縫を始めた。

すると宗助は脇で挟んだ頭を少し擡げて、

「何うも字と云ふものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「何故」

「何故つて、幾何容易い字でも、こりや變だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大變迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、ちつと眺めてゐると、何だか違つた様な氣がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて来る。——御前そんな事を経験した事はなにかい」

「まさか」

「己丈かな」と宗助は頭へ手を當てた。

「貴方何うかして入らつしやるのよ」

「矢つ張り神經衰弱の所爲かも知れない」

「左様よ」と細君は夫の顔を見た。夫は漸く立ち上つた。

針箱と糸屑の上を飛び越す様に跨いで、茶の間の襖を開けると、すぐ座敷である。南が玄關で

塞がれてゐるので、突き當りの障子が、日向から急に這入つて來た陣には、うそ寒く映つた。其所を開けると、廂に逼る様な勾配の崖が、縁鼻から聳えてゐるので、朝の内は當つて然るべき筈の日も容易に影を落さない。崖には草が生えてゐる。下からして一側も石で疊んでないから、何時壊れるか分らない虞があるのだけれども、不思議にまだ壊れた事がないさうで、その爲か家主も長い間昔の儘にして放つてある。尤も元は一面の竹藪だつたとかで、それを切り開く時に根丈は掘り返さずに土堤の中に埋て置いたから、地は存外堅つてゐますからねと、町内に二十年も住んでゐる八百屋の爺が、勝手口でわざ／＼説明して呉れた事がある。其時宗助はだつて根が残つてゐれば、又竹が生えて藪になりさうなものぢやないかと聞き返して見た。すると爺は、それがね、あゝ切り開かれて見ると、さう甘く行くもんぢやありませんよ。然し崖丈は大丈夫です。どんな事があつたつて壊えつこはねえんだからと、恰も自分のものを辯護でもする様に力んで歸つて行つた。

崖は秋に入つても別に色づく様子もない。たゞ青い草の匂が樾めて、不揃にもぢや／＼する許である。薄だの蔦だのと云ふ洒落たものに至つては更に見當らない。其代り昔の名残りの孟宗が

中途に二本、上の方に三本程すつくりと立つてゐる。夫が多少黄に染まつて、幹に日の射すときなぞは、軒から首を出すと、土手の上に秋の暖味を眺められる様な心持がする。宗助は朝出て四時過に歸る男だから、日の詰る此頃は、滅多に崖の上を覗く暇を有たなかつた。暗い便所から出て、手鉢の水を手を受けながら、不圖廂の外を見上げた時、始めて竹の事を思ひ出した。幹の頂に濃かな葉が集まつて、丸で坊主頭の様に見える。それが秋の日に酔つて重く下を向いて、寂そりと重なつた葉が一枚も動かない。

宗助は障子を閉て、座敷へ歸つて、机の前へ坐つた。座敷とは云ひながら客を通すから左様名づける迄で、實は書齋とか居間とか云ふ方が穩當である。北側に床があるので、申譯の爲に變な軸を掛けて、其前に朱泥の色をした拙な花活が飾つてある。欄間には額も何もない。唯眞鍮の折釘丈が二本光つてゐる。其他には硝子戸の張つた書棚が一つある。けれども中には別には是と云つて、目立つ程の立派なものも這入つてゐない。

宗助は銀金具の付いた机の抽を出して頻に中を檢べ出したが、別に何も見付け出さないうちに、はたりと締めて仕舞つた。夫から硯箱の蓋を取つて、手紙を書き始めた。一本書いて封をし

て、一寸考へたが、

「おい、佐伯のうちは中六番町何番地だつたかね」と模越に細君に聞いた。

「二十五番地ぢやなくつて」と細君は答へたが、宗助が名宛を書き終る頃になつて、

「手紙ぢや駄目よ。行つて能く話をして來なくつちや」と付け加へた。

「まあ、駄目迄も手紙を一本出して置かう。夫で不可なかつたら出掛けるとするさ」と云ひ切つたが、細君が返事をしないので、

「ねえ、おい、夫で好いだらう」と念を押した。

細君は悪いとも云ひ兼ねたと見えて、其上争ひもしなかつた。宗助は郵便を持つた儘、座敷から直ぐ玄關に出た。細君は夫の足音を聞いて始めて、座を立つたが、是は茶の間の縁傳ひに玄關に出た。

「一寸散歩に行つて來るよ」

「行つて入らつしやい」と細君は微笑しながら答へた。

三十分許して格子ががらりと開いたので、御米は又裁縫の手を已めて、縁傳ひに玄關へ出て見

ると、歸つたと思ふ宗助の代りに、高等學校の制帽を被つた、弟の小六が這入つて來た。袴の裾が五六寸しか出ない位の、長い黒羅紗のマントの釦を外しながら、

「暑い」と云つてゐる。

「だつて餘まりだわ。此御天氣にそんな厚いものを着て出るなんて」

「何、日が暮れたら寒いだらうと思つて」と小六は云譯を半分しながら、嫂の後に跟いて、茶の間へ通つたが、縫ひ掛けてある着物へ眼を着けて、

「相變らず精が出ますね」と云つたなり、長火鉢の前へ胡坐をかいだ。嫂は裁縫を隅の方へ押し遣つて置いて、小六の向へ來て、一寸鐵瓶を卸して炭を繼ぎ始めた。

「御茶なら澤山です」と小六が云つた。

「厭？」と女學生流に念を押した御米は、

「ちや御菓子は」と云つて笑ひかけた。

「有るんですか」と小六が聞いた。

「いゝえ、無いの」と正直に答へたが、思ひ出した様に、「待つて頂戴、有るかも知れないわ」

と云ひながら立ち上がる拍子に、横にあつた炭取を取り退けて、袋戸棚を開けた。小六は御米の後姿の、羽織が帯で高くなつた邊を眺めてゐた。何を探すのだから、中々手間が取れさうなので、「ぢや御菓子も廢しにしませう。それよりか、今日は兄さんは何うしました」と聞いた。

「兄さんは今一寸」と後向の儘答へて、御米は矢張り戸棚の中を探してゐる。やがてはたりと戸を締めて、

「駄目よ。何時の間にか兄さんがみんな食べて仕舞つた」と云ひながら、又火鉢の向へ歸つて來た。

「ぢや晩に何か御馳走なさい」

「えゝ爲てよ」と柱時計を見ると、もう四時近くである。御米は「四時、五時、六時」と時間勘定した。小六は黙つて嫂の顔を見てゐた。彼は實際、嫂の御馳走には餘り興味を持ち得なかつたのである。

「姉さん、兄さんは佐伯へ行つて呉れたんですかね」と聞いた。

「此間から行く行くつて云つてゐる事は云つてゐるのよ。だけど、兄さんも朝出て夕方に歸るんで

せう。歸ると草臥れちまつて、御湯に行くのも大儀さうなんでも。だから、さう責めるのも實際御氣の毒よ」

「そりや兄さんも忙がしいには違なからうけれども、僕もあれが極まらないと氣掛りで落ち付いて勉強も出来ないんだから」と云ひながら、小六は眞鍮の火箸を取つて、火鉢の灰の中へ何かしきりに書き出した。御米は其動く火箸の先を見てゐた。

「だから先刻手紙を出して置いたのよ」と慰める様に云つた。

「何て」

「そりや私もつい見なかつたの。けれども、屹度あの相談よ。今に兄さんが歸つて來たら聞いて御覽なさい。屹度左様よ」

「もし手紙を出したのなら、其用には違ないでせう」

「えゝ、本當に出したのよ。今兄さんが其手紙を持つて、出しに行つた所なの」

小六はこれ以上辯解の様な慰藉の様な、嫂の言葉に耳を借したくなかつた。散歩に出る閑があるなら、手紙の代りに自分で足を運んで呉れたら、よささうなものだと思ふと、餘り好い心持で